李善注「事無高翫、而情之所賞、即以爲美」考

――謝霊運「從斤竹澗越嶺溪行」詩の「情」の解釈に関わって――

佐竹保子

一　はじめに――問題の所在

李善（七世紀中期）注『文選』巻二十二に収められている謝霊運（三八五～四三三）「斤竹澗より嶺を越えて渓行きす（從斤竹澗越嶺溪行）」詩[1]（以下「斤竹澗」詩と略称する）の第十九句目「情用賞爲美」の解釈について、二〇〇八年六月に台灣の「重探自然」学会に提出した拙稿「謝靈運詩文中的「賞」和「情[2]」」（以下「前稿」と呼ぶ）は、矢淵孝良「謝霊運山水詩の背景――始寧時代を中心として」一七六頁の説に拠りつつ[3]、従前とは異なる解釈を提出した。前稿では、その解釈は、該句に注を付している李善の解釈とも異なっている旨を記した。

しかしその後、李善が該句の解釈に用いている「所」字を検討していくうちに、李善の該句への解釈は、意外にも、矢淵説、引いては拙稿の説と必ずしも異なるものではない可能性があることに気付いた。それは同時に、謝詩の該句に対してのみならず、該句の李善注に対しても、従来とは異なる読み方を提示することになる。そこで敢えてここに、その異なる読み方を記して、大方のご叱正を乞いたいと願う次第である。

二　前稿のまとめ

論述の都合上、本稿に関わる範囲で、前稿に記した要点を、箇条書きの形で略述させていただきたい。

一、謝霊運「斤竹澗」詩第十九句目の「情用賞爲美」は、従来「情が賞する対象を美とする」と解釈されることが多かった。しかし該句の鍵言葉を記号に置き換えると「A用B爲C」となり、この構造の文には、古来「AがBをCとする」と「AがBによってCとなる」との二

つの読み方がある。前者をかりに「B＝C」型、後者を「A＝C」型とすると、該句は従来「B＝C」型と考えられてきたわけであるが、句構造としては「A＝C」型と見ることも不可能ではない。

二、第十九句目において、右のAに当たるのは「情」である。謝靈運詩文の「情」を調べると、仏教関係の韻文や散文、および山水詩においては、「情」は人を迷いと悲哀に陥らせるものであり、その無化こそ理想的な境地である（たとえば「石門新營所住、四面高山、迴溪石瀨、脩竹茂林」詩の第二十二句目「理來情無存」）とされることが多い。

三、謝靈運が敬服したとされる高僧の慧遠、謝靈運がその頓悟説にいち早く賛同したとされる竺道生、および謝靈運がその山水観に多大の影響を受けた居士の宗炳、この三名の文章における「情」も、多くこの「情」の含意を持つ。

四、右に挙げた慧遠、竺道生、さらに慧遠に示教した鳩摩羅什、また北方から来て慧遠のもとに一年足らず止まった仏駄跋陀羅、この四名の訳経にも、この含意の「情」がしばしば登場する。

五、以上のように、謝靈運やその周囲では、「情」はそもそも存在せず、「理　来りて　情　存する無し」が本来の境地とされている。しかし、そのことを未だ悟り得ず、いまだ輪廻をくり返している修行者にとって、「情」は存在する。その「情」を「化」し「潔」らかにすることが重要だと、慧遠や宗炳は説いている。

六、そうとすれば、謝詩第十九句目「情用賞爲美」は、元来あり得べからざる、しかし修行中の身には依然存在する「情」が、「賞」すなわち山水欣賞によって、「美」すなわち慧遠や宗炳の記す「化」され「潔」らかにされた状態になってゆく、という意味に取り得る。

七、ここで該詩の構成を見れば、林文月氏も指摘するように[4]、全体が四段落に分かれており、第十九句目は、第四段落の初句に当たる。該詩の第一段落（四句）は「主人公の存する時空」、第二段落（十句）は「主人公と山水との幸せな交流」（山水欣賞）、第三段落（四句）は「山阿人」に近づき得ず交流し得ぬ鬱屈」を、それぞれ詠じている。続く第十九句目の「情」が、右の第三段落目の「鬱屈」を、同じく「賞」が、第二段落目の「山水欣賞」を承け、「情用賞爲美」はその鬱屈が山水欣賞によって消えていく、すなわち「情」が「美」となることをいう、と解するなら、「情」について二から六までに考察した内容と矛盾無く合致する。詩の構成上、第十九句目は、第二段落と第三段落を統合しつつ、

最末聯である二十一句目と二十二句目を開く位置にあると判断される。

八、では第二十句目「事味竟誰辨」はどういう位置にあるのか。これは、「情」が「賞」を通じて「美」となるという「事」は、誰にでも分かるものではない、との意であろう。というのも、たとえば慧遠の文章において、「情」の「化」は戒律の遵守によると明言されており、山水欣賞によるとはされていない。第十九句目に述べられた奥義は、慧遠にさえ「辨」じ得ない「味」い「事」である。「賞」の妙を体得した主人公こそその「事」を「辨」じ得ると、詩は第二十句目で主張していると考えられる。

九、続く最終聯「觀此遺物慮、一悟得所遣」は、第十九句目で「美」と「爲」った「情」、別言すれば「美」と「爲」ったけれども依然存在する「情」が、ついに存在しなくなる境地を暗示するものと考えられる。すなわち五に示した「理　来りて　情　存する無し」の境地である。それは、李善注所引の『荘子』斉物論篇の本文および郭象注から、判断される。

以上のように解読を進めた場合、一点ひっかかる所がある。九に挙げたように、該詩の最終聯について、李善は、『荘子』とその郭象注を引用することによって適確に読み解いていると考えられる。その李善が、最終聯を導き出す関鍵となる第十九句目を、一に挙げた「A＝C」型ではなく「B＝C」型の句構造で、すなわち「情が賞を通じて美となる」ではなく「情が賞を（その賞する対象を）美とする」という意味で解するだろうか、という点である。そこで、該詩の第十九句目に対する李善の注を、改めて検討する必要に迫られることとなる。

三　李善の注文および李善以後の古典的解釈

まず第十九句目を含む一聯と、該聯に対する李善注を掲げる。なお、以下に引用する原文には、その読み方自体が問題となるものが含まれる。そうした原文には書き下し文や訳文を付していないが、なにとぞ諒とせられたい。拙稿の推論過程および結論部分において、それらはすべて明らかとなるはずである。

「情用賞爲美、事味竟誰辨」言事無高翫、而情之所賞、即以爲美、此理幽味、誰能分別乎。

注文後半の「此理」以下八字は、明らかに第二十句「事味くして　竟に誰か辨ぜん」に対する解釈なので、今は除く。第十九句目への解釈としては「事無」以下十三字が考

察の対象となる。

右の李善注を参照した上で該聯を解釈したものとして、現存する中でもっとも古いのは、五臣注にある張銑の次の一文であろう。

銑曰、言賞樂忠誠、自以爲美、此事深昧、誰能辨也。

張銑注の後半八字も第二十句目への解釈であるから、これを除いて「賞樂」以下八字に焦点を絞る。とはいえその前半四字の「賞樂忠誠」は、このままでは句の構造すら見分かちがたい。二字名詞の並列なのか、あるいは動賓構造か、はたまた主述構造であるのか。

そこで該句の直前に位置する第十七・十八句目「蘭を握るも　勤は徒らに結ぼれ、麻を折るも　心の展ぶる莫し（握蘭勤徒結、折麻心莫展）」に対する同じ五臣注を参考にすると、呂延済の名を冠して次のように記されている。

濟曰、蘭麻、皆芳草、可以投贈者。言事君勤苦、空結於懷、相知之心、無由申展。（濟曰く「蘭・麻は、皆な芳草の、以て投贈すべき者なり。言うこころは　君に事えて勤苦なるも、空しく懷に結ぼれ、相知の心、申展するに由し無し」）

原詩の第十七句「握蘭勤徒結」が、「君に事えて勤苦なるも、空しく懷に結ぼれ」と説明されている。つまり「握蘭勤」が、「君に事えて勤苦なる」ことの比喩的表現と解されているのである。同じ五臣である張銑の注がこれを承けているとすれば、張銑注にある「忠誠」とは、「君に事えて勤苦なる」ことにほかなるまい。そうとすれば、「賞樂忠誠」とは、「忠誠を賞楽す」という動賓構造と判断される。[3]

張銑注の後半四字「自以爲美」は、その「忠誠を賞楽す」を主語とする述語部分である。それゆえ、「美」と「為」るのは「忠誠を賞楽す」ること、すなわち原詩の語でいえば「賞」となる。つまり張銑の注は、「賞」を「美」とする解釈である。これは、拙稿前章の「一」に挙げた「A用B爲C」構文における「B＝C」型にあてはまる。この五臣の解釈が、李善の解釈を襲うものであったのか、それともそこから外れるものであったのか、今は問わない。ただそれが、該詩の第十九句目を「B＝C」型の構文に流し込む傾きを持つ解釈であることに、留意したい。

五臣の解釈について、さらに留意すべき点が二つある。一つは、李善がおもてだって記さなかった「賞」の対象を、「忠誠」と限定していることである。「賞」の対象は山水ではない。とすればこの解釈は、前章の「七」に記したように、原詩全二十二句の半分近くを占める第二段落十句を、ほぼ閑却していると言える。

いま一つは、原詩にある「情」の字が、五臣の注文からはいつのまにか脱落していることである。五臣が原詩の

「情」字に、それほど重要な意味を認めていないことの、あらわれかもしれない。五臣の解釈については、以上の三点を指摘しておきたい。

五臣について該詩の第十九句目に解釈を附した主な人物は、管見の限りでは、元の劉履である。[6] その「選詩補注」について『四庫全書総目提要』が「大抵、これを五臣の旧注に本づく」と評するとおり、該詩の解釈も、ほぼ五臣注を襲っている。ただ、右に挙げたように五臣が該詩の第十七句に「君に事えて勤苦なるも、空しく懐に結ばれ」と注して「君」と漠然と示した対象を、劉履は「廬陵王」に限定している。[7] 謝霊運が顔延之らとともに仕え、該詩製作の時点では殺害されていたと考えられる廬陵王劉義真のことである。第十九句目を含む一聯については、次のように記す。

夫情以賞適爲美、況往事暗昧、竟無爲之辨明者、何乃自貽憂念而不爲樂哉。（夫れ情は賞適を以て美と為す、況んや往事は暗昧く、竟に之が為めに弁明する無ければ、何ぞ乃ち自ら憂念を貽して楽しみを為さざらんや）

右の冒頭にある「情以賞適爲美」が、第十九句目「情用賞爲美」への解釈である。原詩の「用」字を「以」字に置き換えて、拙稿前章の「一」に挙げた「B＝C」型の構文にとらえている。つまり劉履は「賞」が「美」であると解しているのであり、四庫提要の指摘どおりに、この点は五臣を襲っている。

だが劉履は、五臣が注文に省いた「情」字を、「夫」字の下に復活させている。さらに五臣の「賞樂忠誠」を、「賞適」とする。前掲した引用文は「そもそも情は賞適を美とする。まして過去のこと（廬陵王殺害事件）ははっきりせず、畢竟明らかにすることはできない、それなのにどうしてみずから憂いにとらわれたまま楽しもうとしないのか」と訳しうる。すなわち劉履は、原詩の第三段落の詠じる鬱屈を、廬陵王殺害事件に対するものとするが、それに続く第十九・二十句目については、あの事件はもはや真相を明らかにすることができないのだから、ここでは憂いを忘れて「賞適」し「楽」しむべきだ、と主人公がみずからを言い聞かせる含意に読み解いている、と考えられる。

では何を「賞適」するのか。続く第二十一句目「覩此遺物慮」への劉履の解釈は次のようである。「且らく当に此の佳勝を観、物慮を遺れ去るべし（且當觀此佳勝、遺去物慮）」。そうとすれば、主人公が「賞適」し「楽」しむべき対象とは「佳勝」、すなわち美しい山水の景とされていよう。後述するが、近代の葉笑雪氏の解釈が、ほぼこれを襲っている。

まとめれば、劉履の該詩第十九句にたいする解釈は、句の構造については五臣に倣っているが、五臣が閑却した原詩の「情」字を掬い上げている点、また「賞」を「山水欣

賞」として解釈している点、この二点において五臣に異なると言えよう。ただし、「情」字を掬い上げているとはいえ、原詩と同じ字をくり返すだけで、何の説明も施されていないことは指摘しておかなければならない。

四　近代の解釈（1）　一九八〇年代まで

前章の元の劉履からはかなり時を隔てることになるが、本章では、謝霊運「斤竹澗」詩第十九句目に対する、近現代人の解釈を辿ってみたい。というのも、李善や五臣や劉履をなぞるだけではない、詳細な、したがって結果として往々その人独自の見解を含むことになる解釈は、近現代にこそ多いように見受けられるからである。その中でも日本人の解釈を相当数取り上げることとなる。なぜなら、日本人の場合は、旧来の解釈を襲うにしても、それをそのまま引用するのではなく、いったん現代日本語に訳さなければならない。[8] その訳出の過程で、ほぼ必ずと言っていいほど、原文にはない、訳者独自の言葉が付け加えられる傾きがあるからである。もとよりこの点は、日本人に限らず、古典中国語および現代日本語以外の言葉で該句を詳説した例が、残念ながら管見の限りでは見出せない。それゆえ、以下の挙例に限られることとなった。

まず前章にも触れた葉笑雪氏は、一九五七年の著書で第十九句目を次のように説明している。[9]

『情用』二句、説且收拾思古幽情、入神地欣賞眼前美景；（「情用」の二句は、過去を思うひそやかな情念をしばし収めて、眼前の美しい景色を一心に欣賞しようと言っている）

引用文の「思古幽情」とは、第十九句目に先立つ第十五句目から十九句目までの第三段落の詠出、すなわち「山阿人」と交流し得ない鬱屈を指していようから、原詩の「情」に当たることばは、「入神地」であろう。また直後に「欣賞眼前美景」とあるので、「眼前の景」が「賞」のはたらく対象で、それが「美」である、と解釈されていることが分かる。すなわちこれは、前々章の「一」に挙げた、「A用B爲C」の文型におけるB＝C型に属している。

葉説に一年遅れる余冠英氏の注には「『情用』二句、言情之所賞便是心以爲美（「情用」の二句は、情の賞する所はそのまま心が美とするという意味である）」[10]とある。「情」の説明や「賞」の対象への言及がなされていないが、葉説とほぼ同様の解釈と考えられる。

黄節氏の注釈も葉著の翌年に刊行されている。李善注に加えて、前章に挙げた元の劉履の注をそのまま引いており、

基本的に劉注を襲うものであることを示している。[11]

日本人で該句を詳細に解説したのは、一九六二年の小尾郊一氏である。小尾氏は、「斤竹澗」詩の末四句を引用した後、次のように述べる。

と言うのは、自然の風物には何の区別もないが、人間の感情が触発されて興趣を添えるところが美であり、賞心を持ってこそ始めて自然美を感得出来るというのであろう。[12]

また、第十九句目に対する李善の注については

つまり李善によれば、味わう所に自然美を感得出来るというのであろう。この「賞」もこの詩の前後から考えて、自然の山水をたのしみ味わうと見てさしつかえないであろう。[13]

第十九句目冒頭の「情」が、「人間の感情」と言い換えられている。同三字目の「賞」は、「自然の山水をたのしみ味わう」意であることが明言されており、先行する葉説と同様である。

他方、原詩の「爲美」については「自然美を感得出来る」として二度繰り返される。「美」となるのは「自然」であり、その「自然」は、先述のように「自然の山水」で、[14]それは「賞」、つまり「たのしみ味わう」対象とされている。この構造も、「A用B爲C」におけるB＝C型に属している。すなわち句の構造については、小尾氏の解釈も、五臣以来葉説や余説まで続く枠組みを襲っていると言える。

一九六三年の内田泉之助・網祐次両氏の訳注、同年の斯波六郎・花房英樹両氏の訳注では、それぞれ次のようである。

すべて心にかなうことがよろしいと思うのであるが、[15]思えば、楽しみというものは、心に適うことが一番だ。[16]

いずれも前章に挙げた元の劉履の「夫情以賞適爲美」に即していよう。劉履の「賞適」という語が「心にかな（適）う」と訳されている。

しかし、原詩の「情」を指す劉履の「情」に当たる訳語が、全体の中に融解しているようで、明示的には見出せない。かりに、内田・網訳の「と思うのである」、斯波・花房訳の「思えば」がそれに当たるとしても、「思えば」「と思うのである」は、文の中核をなすことばではない。中核を額縁のように包みこんでおり、該句の解釈に中核部分ほどには必須ではない。つまり、両訳の解釈において原詩の「情」の意味は、極言すれば訳出しなくとも構わないほどに薄められ一般化されていると言えよう。そしてこの一般化という点では、「情」を「人間の感情」とする前掲した小尾氏の言い換えも同様であろう。

さらに原詩の「美」を指す劉履の「美」が、内田・網訳

においては「よろしい」、斯波・花房訳においては「一番だ」とされている。原詩の語に即すというよりは、むしろ意訳に近くなっていることは否みがたい。

一九八七年の顧紹柏氏の注釈も「参看元劉履《選詩補注》巻六（元の劉履「選詩補注」巻六を参照せよ）」と記し、劉履説に拠る。[17] しかし顧氏は、原詩の「賞」には、次のように附注する。

賞、賞心、即以心相賞、指知己良朋在一起傾心吐胆。〝賞心〟一詞在霊運詩中多次出現、有特定含意。這里用以指与廬陵王劉義真等的深厚友誼。（賞とは、賞心のこと、つまり心で賞しあうのであり、知己良友がともに真心をさらけ出すことを指す。「賞心」ということばは霊運の詩に多く登場し、特定の意味を持つ。ここでは、廬陵王劉義真たちとの深い友情を指す）

顧氏は、「賞」を廬陵王劉義真ら知己との厚い友情をあらわすとする。これは、「賞」を山水欣賞ととる劉履説とは違い、むしろ小稿第三章に挙げた五臣の張銑の「忠誠を賞楽し、自ら以て美と為す」に近い。

さらに顧氏は、原詩の「情」には特に焦点を当てていない。この点は、注文から「情」字を脱落させている五臣や、原詩そのままに「情」と記すのみの劉履、ひいては本章にこれまで辿ってきた、葉説を除く各位の「情」字に対する意識と、ほぼ同様とみなせよう。

四　近代の解釈（2）　一九九〇年代以後

前章所掲の各位に対し、一九九二年に刊行された陰法魯審訂『昭明文選訳注』は、「情」字にも詳細な解説を加える。該書は、三名の主編者と十一名の訳注者を擁し、当該部分がどの人物の手に成るのか不明であるため、以下に人名を記さず『訳注』と略称することにする。『訳注』は次のように記す。関連箇所が複数にわたるため、便宜上引用文に番号を付す。

1　山水・草木・魚鳥之美、全在乎一个〝賞〟字、而且出之于〝情〟。此中〝事〟不可以理析以詞弁、完全出于直観感悟。但既以〝情〟賞、詩人之山水就塗上了他的或道或仏的主観色彩。[18]（山水や草木や魚鳥の美は、すべて「賞」の字にあり、同時に「情」から出ている。この「事」は理屈や言葉で分析できるものではなく、完全に直観的な悟りから出ている。だが「情」によって賞している以上、詩人の山水は彼の道教なり仏教なりの主観的な色合いに染め上げられている）

2　情用：即用情。賞：欣賞。（「情用」とは、情を用いること。「賞」とは、欣賞すること）

3

李善注以上両句説〝言事無高玩、而情之所賞既以為美、此理幽昧誰能分別乎？〟意思是客観物象、只要以真情去欣賞、即使閑花小草、也自能獲得美感。[19]（李善は以上の二句に「…（引用者略）…」と注している。客観的な物象は、真心から欣賞しさえすれば、たとえつまらない草花でも、おのずと美しいと感じられる、という意味である）

4

真情観賞物象物皆美、此理可感而誰能明弁。（まごころで物象を観賞すると物はすべて美しい、この道理は感じうるが誰が明らかにいいあらわせよう）

『訳注』は1で「山水・草木・魚鳥の美」が「情」から出たものとし、さらにその「情」を、3と4で「真情」と言い換える。これに伴い、2では「情用」は「用情」であると明言し、1・3・4でも「既以〝情〟賞」「只要以真情去欣賞」「真情観賞物象」と解説するように、原詩の「情用賞爲美」を、上二字を「用情」と転倒させた形で理解している。まごころで欣賞すればそれは美となる、との意である。「美」と「爲」るのは、1に「山水・草木・魚鳥之美」、3に「即使閑花小草、也自能獲得美感」、4に「真情観賞物象、物皆美」とあるとおりに、広義には「物象」であり、具体的には「山水・草木・魚鳥」「閑花小草」である。これを小稿第二章の一に挙げた「A用B爲C」の文型にあてはめれば、『訳注』は上二字を転倒させて解しているためにあてはめ難くはあるのだが、Bに当たるのが「賞」字で、その「賞」する対象がCに当たる「美」となる、という構造であることは動かない。すなわち、『訳注』も、基本的に五臣注以来のB＝C型の句構造によって、「斤竹澗」詩の第十九句目を読み解いていることが分かる。

これに似るのが、一九九六年の王令樾氏の解釈である。

但是心情用作欣賞的就是美好、…然自己清志所欣賞的、即自以爲美。[20]（けれども心情が欣賞する所こそ美しい、…だが自己の清志が欣賞する所は、そのままおのずと美となる）

王氏は、『訳注』のように該句の初二字を転倒させはしないが、該句の「情」を、「心情」「清志」と言い換える。「清志」とは、清浄なこころの意であろう。感情一般ではなく、明らかにプラスに価値づけられた言葉に言い換えている点が、『訳注』の「真情」に共通している。また、「美」となるのは「欣賞的」とされており、欣賞する対象のようである。[21]

右の王説より数年早く発表されている森野繁夫氏の解釈は、元の劉履説を基盤とする網氏らおよび花房氏らの解釈と、小尾氏の解釈とを、折衷した感がある。森野氏は記す。

さて、我が賞心にかなったものこそが美なるものであ

るが、この道理は奥が深いので、結局は誰にもわからないだろう。…（引用者略）…李善は此の二句について「言ふこころは、事に高翫無く、情の賞する所を、即ち以て美と為す。此の理は幽昧なれば、誰か能く分別せんや」という意味であると説明する。自然のなかで自分が感動したものこそが美であって、別に高尚な翫味の仕方などは無い。しかしながら此の理は奥の深いところがあって、わかる人はいないであろう、と言う。[22]

該句第一字目の「情」について、劉履がそのまま「情」と記し、網氏らや花房氏らが敢えて訳出しないのと同様に、森野氏もことさらにはとりあげない。第三字目の「賞」については、劉履が「賞適」と言い換え、網氏らは「心にかな（適）うこと」とし、森野氏は「我が賞心にかなったもの」「自然のなかで自分が感動したもの」とする。

他方、原詩の「美」は、網氏らが「よろしい」、花房氏らが「一番だ」と意訳するのとは異なり、森野氏は「美」とそのまま記す。また「賞」（「賞心にかなった」「感動した」）する対象を「自然のなかで」と限定して、もっぱら山水に焦点を当てているようである。この二点は小尾氏と同様である。

ただここで一つ留意しておきたいことがある。先述のように原詩の「賞」を、劉履は「賞適」、網氏・花房氏らは「心にかな（適）うこと」と訳していた。これに対し、森野氏は「我が賞心にかなったもの」「自分が感動したもの」と訳出する。両者の間には、「賞」を「こと」ととらえるか、「もの」ととらえるかの相違がある。些事のようではあるが、これは、原詩の「賞」を「賞することそれ自体」と解するか、「賞する対象である外界の物象」と解するかの違いであり、ひいては「美」となるものがどちらであるかという問題に関わっていく。

逆の面から考えれば、網氏・花房氏らは原詩の「賞」を「賞」する「こと」それ自体としてとらえたがゆえに、原詩の「美」を「美」とそのままの語では訳しがたくなり、「一番だ」「よろしい」と意訳したとも推察される。他方、森野氏のように「賞」する対象である「もの」ととらえれば、それはそのまま「美」であるとしてよいことになろう。森野氏と同じ立場を取るのが、前掲した『訳注』や王氏である。それゆえ『訳注』は、「山水・草木・魚鳥」「閑花小草」と、具体的に「もの」の名称を挙げることができたのである。

原詩の「賞」は「こと」なのか、「もの」なのか。じつはこの点が、五臣に先んずる李善の釈文を理解する上でも重要となってくると思われる。ただ、この点についてここでは注意を喚起するに止め、ひとまず以上三章に辿った、先行する解釈の要点を、以下にまとめておこう。

一、「斤竹澗」詩の第十九句目「情用賞爲美」について、該句を「A用B爲C」と置き換えれば、五臣以来一貫してB＝C型の句構造で解釈されている。

二、第一字目の「情」は、五臣注以来あまり注目されてきていない。例外的に葉笑雪氏が「入神地」、『訳注』が「真情」、王令樾氏が「清志」と解し、プラスに価値づけられた言葉とする。ただし『訳注』はそのために該句の初二字を倒置する。

三、第三字目の「賞」は、「賞」する「こと」それ自体か、「賞」する対象である「もの」か、という分岐が生じている。「賞」する「こと」それ自体である場合は、それが「美」となるとはいかなることかという問題も惹起する。

四、第三字目の「賞」が「こと」であるにせよ「もの」であるにせよ、なにを「賞」するかという点でも分岐がある。すなわち「自然の山水」「山水・草木・魚鳥」とする説と、「忠誠」「深厚友誼」とする説である。小稿は、第一義的には前者であると考える。というのも、小稿第二章の「七」に記したように、該句は「斤竹澗」詩全篇四段落のうちの最終段落の冒頭に当たり、第二段落目の「山水欣賞」と第三段落目の「山阿人」と交流し得ぬ鬱屈」との双方を統括することによって、最終聯の第二十一・二十二句目を開く位置にあると考えられるからである。もしも「賞」するものを、「山水」ではなく「忠誠」「深厚友誼」とする後者の説を採るならば、第十九句目は、第三段落目を承けるに止まってしまう。全篇中もっとも長い第二段落目は、第二十一句目「覩此遺物慮」に至ってようやく掬い取られることとなる。構成上バランスが悪くなり、第十九句目の持つ意味も狭められる。よって後者の説は、「斤竹澗」詩を敢えて多面的に発現させて重層的な読解を試みようとする場合に可能となるところの、第二義的な読みと考えておきたい。

六　李善注の解釈（1）「事」と「翫」

前三章に紹介した先行する解釈を視野に収めつつ、本章では、それらすべてに先んずる李善の解釈を検討する。李善は、「斤竹澗」詩の第十九・二十句目には、何の典故も引用しない。小稿第三章の冒頭に記したように、次の二十三字を記すのみである。

言事無高翫、而情之所賞、即以爲美、此理幽昧、誰能分別乎。

先述したとおり、「此理」以下八字は第二十句目に対する注

釈なので、直接の検討の対象は、前半の「事無」以下十三字となる。

まず初字の「事」について。『文選』の李善注において、付注された原文や引用された典故に「事」字が含まれる場合を除き、李善自身の釈文で用いられているとおぼしい「事」のみを検討すれば、以下のような例が見出せる。行論の都合上、各例に番号を付し、付注された原文を「　」に括って示す。以下も同じ。

1　「於是采少君之端信、庶欒大之貞固」善曰、…欒大、見西都賦。凡人姓名及事易知而別巻重見者、云見某篇、亦従省也。（「是に於いて少君の端信を采り、欒大の貞固を庶う」善曰く、…欒大は、「西都賦」に見ゆ。凡そ人の姓名及び事の知り易く而して別巻に重ねて見ゆるは、「某篇に見ゆ」と云い、亦た省に従うなり）（巻二張衡「西京賦」注）

2　「朝觀夕覽、何與書紳」言朝夕觀覽圖畫、何如書紳之事乎。（「朝に観　夕べに覧る、紳に書するに何与ぞ」言うこころは朝夕に図画を観覧するは、書紳の事に何如ぞ、と）（巻十一　何晏「景福殿賦」注）

3　「臆迺歎息、擧首奮翼。口不能言、請對以臆」請以臆中之事以對也。（「臆は迺ち歎息し、首を挙げ翼を奮う。口に言う能わざれば、対うるに臆を以てせんことを請う」臆中の事を以て以て対えんことを請うなり）（巻十三賈誼「鵩鳥賦」注）

4　「遵四時以歎逝、瞻萬物而思紛」遵、循也。循四時而歎其逝往之事。（「四時に遵いて以て逝くを歎じ、萬物を瞻て思い紛たり」…四時に循いて其の逝往の事を歎ず）（巻十七　陸機「文賦」注）

5　「安排徒空言、幽獨賴鳴琴」言安排之事、空有斯言。（「安排　徒らに空言、幽獨　鳴琴に賴る」言うこころは安排の事、空しく斯の言有るのみ、と）（巻二十二　謝霊運「晚出西射堂」詩注）

1は、「凡そ」と冠して李善注の体例を語る。およそ、人の姓名や事柄で存知しやすく他の巻に重複してあらわれるものについては、「某篇に見ゆ」と書して説明を省略する、という。1の李注にある「事」とは、『文選』所収作品に登場する「人の姓名」以外のほとんどすべてを指し得よう。もとより例えば1の原文にある「於是」や「之」などは「事」の覆う範囲から外れるかもしれないが、それにしても茫漠たる範囲を指していることは疑いない。

2、3、4の「事」も同様である。2、3、4で注目されるのは、各原文の「書紳」「臆」「逝」が、注文では「書紳之事」「臆中之事」「逝往之事」と、「事」字を加え敷衍されていることである。加えられた「事」は、しかし「書紳」

「臆（中）」「逝（往）」に、何か新たに実質的な意味を増し加えているのでもなければ、それらの意味を狭め限定しているのでもない。「事」があろうと無かろうと、意味の上で大きな変わりはない。そうした事象が現出するのは、「事」が積極的限定的な意味機能を担わない、きわめて茫漠たる語であるからにほかならない。

同じことは5についても言える。5は謝霊運の「晩に西射堂を出づ」詩の最終聯である。その上の句の初二字の「安排」が、注文で「安排之事」と四字に敷衍されている。原詩の二字と注文の四字は、意味の上でほぼ重なり合っている。

以上、『文選』李善注の釈文にある「事」は、特に強い限定性や色調を帯びずに、ただある茫漠たる範囲をあらわすことばであるとまとめられよう。

では、当該句の李善注に「事無高翫」とある「翫」はどうか。「翫」は、『文選』所収の謝霊運自身の詩に二例見える。一例目は、「斤竹澗」詩と同じ巻に収められる「石門の最高頂に登る」詩である。その第八聯目に次のようにある。

心契九秋幹　心は　九旬の秋を経る幹に契り
目翫三春荑　目は　三月（みつき）の春に芽ぐむ若芽をよろこぶ

右の聯について、李善は「九秋」と「三春」の典故を引くのみで、「翫」には言及していない。

二例目は、今まさに検討中の「斤竹澗」詩に見える。問題の第十九句目に先立つ第五聯目に次のようにある。

川渚屢逕復　川の渚は　しばしばゆきつもどりつ
乗流翫迴轉　流れに乗って　回転をたのしむ

これについても、李善は「逕復」と「乗流」の典故は示すが、「翫」には言及しない。

さらに、謝霊運詩には含まれないが、李善がそれを解説する釈文の中に「翫」字があらわれる例がある。『文選』巻二十六所収の謝霊運「彭蠡湖口に入る」詩の第三聯目である。その「月に乗じて哀狖を聴き、露に浥いて芳蓀を覩らす」を、李善は次のような隔句対の一文によって解釈している。

言乗月而遊、以聽哀狖之響、濕露而行、爲翫芳叢之覩。
（言うこころは月に乗じて遊び、以て哀狖の響きを聴き、露に湿りて行き、為めに芳叢の覩（かお）りを翫（め）づ、と）

以上に挙げた謝霊運の詩句は、いずれも彼の山水詩の中の山水を描出した部分である。前二例から推測するに、謝霊運の山水詩に出てくる「翫」の意味は、李善にとって、ことさら付注する必要もないほど自明であったようである。それゆえにこそ後一例のように、李善自身が山水詩句を敷衍する四六文の中に、ごく自然に「翫」字を用いることができたと考えられる。

加えて、『文選』巻二十四所収の張華「何劭に答う」詩二首其の一の第九聯目「耳を属けて鶯の鳴くを聴き、目を流して儵魚を翫づ」に対し、李善は「翫は、猶お悦ぶのごときなり」と付注している。これを併せ考えても、「斤竹澗」詩という謝霊運の山水詩を解説するに際して李善が用いた「翫」は、「山水を悦ぶ」「山水を欣賞する」意味である可能性が相当に高いと言えよう。

以上、李善の注釈における「事」と「翫」を検討してきた。「斤竹澗」詩第十九句目に対する李善注「事無高翫、而情之所賞、即以爲美」の初四字は、直訳すれば「事柄にすぐれた欣賞は無いが」となろうが、さらに「事」字の内包する意味限定性の弱さや意味範囲の茫漠性、また「翫」字と山水詩句との結びつきを勘案するならば、次のような試訳が許されよう。「いったいに（山水に対する）すぐれた欣賞の仕方があるわけではないが」。

七　李善注の解釈（2）「所」

続いて、「斤竹澗」詩第十九句目に対する李善注の「情之所賞」を検討する。この四字の眼目は「所」字の解釈であろう。というのもこれは、小稿第五章での検討から浮かび上がったところの、原詩の「賞」を「賞」する「こと」それ自体と解するか、それとも「賞」する対象である「もの」と解するか、という分岐に関わってくるからである。

直後に動詞が接続する形で用いられる「所～」の語は、「～すること」と「～する対象のもの」との両様の意を持つ。「所～」の含意について、一応の目安として『漢語大詞典』から引用することをお恕し頂くならば、たとえば「所用」の項には「①使用、任用」、「②需用之物」の両意がある。[24] ①には、唐の韓愈の「于襄陽に与うる書」に記される于氏への賛辞「巻舒不隨乎時、文武唯其所用（身の処し方は時世に迎合せず、文と武との才能をひたすら用いておられます）」が、②には、『水滸伝』第四回にある「趙員外」の言葉「一應所用、小子自當準備（必要なすべては、わたくしが用意致します）」が挙例されている。①は「用いること」であり、②は「用いる対象であるもの」と解しうる。ただ挙例の文を見る限りでは、「所用」の①の例も「用」いられる対象である「もの」を指すと解することもできそうではあるが、しかし「用」いる「こと」という解が排除され得ないこともまた確かであろう。

では、『文選』の李善注においてはどうか。前章のように李善の注文で、典故の引用や原作の重複ではない、李善自身の釈文にある「所」を検討すると、次のような例が挙げられる。

1　諸引文證、皆擧先以明後、以示作者必有所祖述也。（諸ろの引く文の証は、皆な先を挙げ以て後を明らかにし、以て作者に必ず祖述する所有るを示すなり）（巻一　班固「兩都賦序」注）

2　是詩、公子奚斯所作也。（是の詩、公子奚斯の作る所なり）（同右）

3　「於是欽柴宗祈、燎薫皇天」善曰、恭敬燔柴、尊崇所祈也。（「是に於いて欽柴し宗祈し、皇天に燎薫す」善曰く、恭敬して燔柴し、祈る所を尊崇するなり）（巻七　揚雄「甘泉賦」注）

4　「氣噴勃以布覆兮、乍跱蹠以狼戾」跱蹠、言其聲跱立、如有所蹠蹋也。（「気　噴勃して以て布覆し、乍ち跱蹠して以て狼戾す」跱蹠は、其の声の跱立すること、蹠蹋する所有るが如きを言うなり）（巻十八　馬融「長笛賦」注）

1は、李善が自らの注の体例について記している。典故の引用は、すべて先行例を挙げて、作者に祖述する対象があることを示す、という。「所祖述」とは、「祖述」するその対象であろう。

2の「所作」も、「公子奚斯」が「作」った対象であり、文中の語で言えば「是の詩」に当たる。3の「尊崇所祈」は、原文一句目にある「宗祈」を説明した動賓構造の句と考えられる。「所祈」は「祈」る対象で、原文二句目に「皇天に燎薫す」とある「皇天」を指していよう。

以上1から3までの「所～」は、すべて「～」する対象である「もの」を指す語と解される。管見の限りでは、李善注の中の、李善自身の釈文と判断される部分にある「所～」は、右の1から3までの例のように、「～」する対象である「もの」を指す場合が多い。しかし中に、「～」する「こと」それ自体をあらわす例がないわけではない。

たとえば4の「蹠蹋する所有るが如し」である。これは、長笛の音が「跱蹠」するという原文二句目の表現を解説して、笛の音色を人の足取りにたとえている。原文一句目は「氣　噴勃して以て布覆し」であり、笛の音がダイナミックに広い音域をカヴァするさまを詠じている。続く対句の「乍ち跱蹠して以て狼戾す」は、対照的に、同じ音や旋律を繰り返すさまをあらわすと考えられる。注文の「蹠蹋する所有るが如し」とは、それがあたかも足踏みをしているようだ、と言うのである。つまり、ここでの「所蹠蹋」とは、「蹠蹋（あしぶみ）」するその「こと」自体を意味していると判断される。もしもかりに「所蹠蹋」を「蹠蹋（あしぶみ）」する対象である「もの」であるとするなら、「所蹠蹋」とは、たとえば「蹠蹋（あしぶみ）」している場所を指すことになる。これでは文脈上通じない。

右のように、李善注における李善自身の釈文と見られる

部分の「所～」には、「～」する「こと」を意味する例が、少数ではあるが認められる。では、『文選』所収の謝靈運詩に対する李善注においては、どうであるのか。

じつは、謝詩に対する李注の、李善自身の釈文と見られる部分において、「所～」の登場する回数は、他の作家の作品における場合よりも多い。それは、謝詩に対する李注の釈文の字数が、他の作家に対するそれよりも多いこと、すなわち母数それ自体の相対量が多いこと、にも起因している。それはとりもなおさずほかならぬ謝詩が、単なる典故の提示だけではとても読み解き得ないほどの、複雑な構造と難解な表現を備えていることを示していよう。それゆえ、通常は典故の指摘のみに禁欲している言葉少ない李善が、こと謝詩に関しては、敢えてみずから説明を買って出ざるを得ない事態に至らしめられていると考えられる。謝詩に対する李善の釈文に「所～」があらわれる例は、次のとおりである。

5 「玉璽戒誠信、黄屋示崇高。事爲名教用、道以神理超」言上二事乃爲名教之所用、而其至道、寔神理而超然也。（「玉璽　誠信を戒め、黄屋　崇高を示す。事は名教の為めに用いられ、道は神理を以て超ゆ」言うこころは上の二事は乃ち名教の用うる所為るも、其の至道は、寔に神理にして超然たるなり、と）（巻二十二　「從遊京口北固應詔」詩注）

6 「孤遊非情歎、賞廢理誰通」言己孤遊、非情所歎、而賞心若廢、茲理誰爲通乎。（「孤遊　情の歎ずるに非ず、賞廃さば　理　誰か通ぜん」言うこころは　己の孤遊は、情の歎く所に非ざるも、賞心　若し廃さば、茲の理　誰か為めに通ぜんや、と）（巻二十二　「於南山往北山經湖中瞻眺」詩注）

7 「結念屬霄漢、孤景莫與諼」言所思念、邈若霄漢、孤影獨處、莫與忘憂。（「結ぼるる念いは霄漢に属き、孤りなる景は与に諼るる莫し」言うこころは　思念する所は、邈かに霄漢の若く、孤影のみ独り処り、与に憂いを忘るる莫し、と）（巻三十　「石門新營所住、四面高山、迴溪石瀨、脩竹茂林」詩注）

8 「感往慮有復、理來情無存」言悲感已往、而夭壽紛錯、故慮有迴復、妙理若來、而物我俱喪、故情無所存。（「感往きて　慮の復る有り、理　来りて　情の存する無し」言うこころは　悲感　已に往かば、夭寿　紛錯す、故に慮に迴復する有り、妙理　若し来らば、物我　俱に喪し、故に情に存する所無し、と）（同右）

5の「名教之所用」は、引用文にあるとおり「上の二事」のことであり、原詩の「事爲名教用」の直前に位置する聯「玉璽　誠信を戒め、黄屋　崇高を示す」の「玉璽」と「黄屋」

とを指す。両者は、原詩にも、それを襲う注でも「事」と称されているが、実質的には「用」いられる対象である「もの」と考えられよう。6では、「己れの孤遊は、情の歎く所に非ず」と、「孤遊」が「情の歎く」対象ではない、という。「所歎」は、「歎」く対象である「もの」と判断される。7では、「思念する所」が「邈かに霄漢の若く、孤影のみ独り処り」とある。おのれの傍らに思慕する相手がいないことを説いているのであるから、「思念」する「こと」自体がはるか「霄漢」に遠く懸け離れているのではなく、「思念」する対象である「もの」、ここでは「人」が、自分とはるかに懸け離れている意、と解さねばならない。

以上の三例では、「所〜」が「〜」する対象である「もの」を意味すると考えられる。それでは8はどうか。注の「情無所存」をかりに、「情」の中から、そこに「存」する対象であるなに「もの」かが「無」くなる意、としてみよう。するとそれは、該注が解釈している原詩句の「理　来たりて情の存する無し」と齟齬を来す。なぜなら、該句と対をなす「感　往きて　慮の復る有り」の下三字が、注に「慮に迴復する有り」と説明されるとおり、「慮いがよみがえる」意であるのだから、それと同じ構造を持つ「情の存する無し」は、（理がやってくるので）「情が存在しなくなる」意でなければならない。「情」の中から、そこに「存」するなに「もの」かが「無」くなるのではない。「情」それ自体が「無」くなるのである。それゆえその注にある「所存」も、「存」する対象である「もの」ではなく、「存」する「こと」それ自体を指す語でなければならない。

あるいは次のように分析することもできる。原詩の「感往」聯に付された李善注に留意するなら、そこでは、「言」字を除く「悲感」以下の六句二十八字が、以下のように三句十四字ごとの隔句対を形成している。

悲感已往、而夭壽紛錯、故慮有迴復、
妙理若來、而物我俱喪、故情無所存。

第三句目の「故に慮いに迴復する有り」に対応するのが、最終句の「故に情に所存する無し」である。ゆえに「迴復」に対応することばは、「所存」となる。「迴復」は類義複合語である。ならば「所存」も、「迴復」と相似た語構成の「存在」「遺存」等と同様の含意を持つはずである。そうとすれば「所存」は、「存」する「こと」それ自体を意味することになる、と。

要するにいずれの方向から考えても、8の「所存」は、前掲した4の馬融「長笛賦」に対する李善注の「所蹠躅」が「蹠躅」する「こと」それ自体と解されたのと同じく、「存」する「こと」それ自体と解されるのである。

『文選』にはさらにもう一箇所、興味深い「所〜」がある。

それは李善自身の釈文の中にではなく、原文と、およびそれについて引用された典故の中に含まれるのであるが、それらがあらわれるのが、ほかでもない、小稿が今まさに検討している「斤竹澗」詩の、最終句なのである。

「覩此遺物慮、一悟得所遣」郭象荘子注曰、將大不類、莫若無心。既遣是非、又遣其所遣、遣之以至於無遣。然後無所不遣、而是非去也。(「此れを観て物慮を遺れ、一悟にして遣る所を得たり」郭象荘子注に曰く、将に大いに類ざらんとせば、無心に若くは莫し。既に是非を遣り、又た其の遣る所を遣り、これを遣り以て遣る無きに至る。然る後に　遣らざる所　無くして、是非　去るなり)

原詩の「一悟にして遣る所を得」の「所遣」に着目されたい。「所遣」をかりに、「遣」る対象である「もの」を意味する、としてみよう。そうすれば「遣る所を得」とは、「遣」る対象である「もの」を、「得」た、という意味になる。つまり、せっかくその「もの」を「遣」ったのに、その「もの」を再び「得」た、取り戻した、という意味になってしまう。これでは原詩の文脈上矛盾する。のみならず、該句の説明として引用されている典故とも食い違う。

典故の郭象『荘子注』[25]には「其の遣る所を遣る」「以て遣る無きに至る」「遣らざる所無し」とある。これらは、「遣る無きに至る」まで徹底的に「遣」るという意である。決して「遣」った「もの」を「得」るという意ではあり得ない。

それゆえこれらの注文が説明しているところの原詩の「所遣」も、「遣」る対象である「もの」ではなく、「遣」るという「こと」それ自体でなければならない。すなわち原詩の「一悟にして遣る所を得」とは、「ひとたび悟って遣ることができた」という意味である。典故の郭象注の「既に是非を遣り、又た其の遣る所を遣る」も、「是非を遣った上に、さらに遣るというそのこと自体をも遣る」という意であることは言を須たない。いずれにおいても「所遣」とは、「遣」るというその「こと」自体を意味している。

以上の検討から、『文選』所収の謝霊運詩や他の作品において、それを解釈した李善自身の文章の中に、「所〜」という構造で、「〜」する対象である「もの」ではなく「〜」する「こと」それ自体をあらわす語が存在することが、確かめられた。その上、『文選』所収の謝詩それ自身においても、「〜」する「こと」それ自体と解さなければ意味の通じない「所〜」構造の語が、ほかならぬ「斤竹澗」詩に含まれていることが分かった。

そうとすれば、該詩第十九句目を解釈した李善の「情之所賞」も、「賞」された対象である「もの」ではなく、「賞」する「こと」それ自体を意味する可能性がきわめて高いで

あろう。すなわち、「事無高翫」に続く「而情之所賞、即以爲美」は、「いったいに（山水に対する）すぐれた欣賞の仕方があるわけではないが」に続いて「しかし情が賞することとそれ自体は、そのまま美となる」と訳しうる、と結論づけられよう。

八　むすびにかえて――李善の釈文の真意

前章で、「斤竹澗」詩の第十九句目に対する李善の解釈「事無高翫、而情之所賞、即以爲美」十三字を訳出した。しかしそれでも問題は残る。最末字の「美」の解釈である。「情」が「賞」する「こと」それ自体が「美」である／になる、とはどういうことか。

第四章に記したように、第十九句目の解釈については、元の劉履の「夫情以賞適爲美」を承けて、内田氏・網氏が「すべて心にかなうことがよろしいと思うのであるが」、斯波氏・花房氏が「思えば、楽しみというものは、心に適うことが一番だ」と訳していた。いずれも、原詩の「賞」及び李善の解釈の「所賞」や劉履の「賞適」を、「賞」する対象である「もの」ではなく、「賞」する「こと」それ自体であると、適確に把握していた。しかしそれが「美」であるとは、日本語として訳し難かったためか、原詩の「美」字および李善や劉履の解釈にもある「美」字を、そのままでは生かし切れずに、「よろしい」「一番だ」と置き換えていた。

けれども、「情之所賞、即以爲美」を、「情が賞することそれ自体が、そのままただちに美である／となる」と解するのは、本当に不都合なのだろうか。第三章以来の検討から、この「賞」が山水の欣賞を意味することはほぼ動かない。そうとすれば、右の八字は、情が山水を欣賞する状態にあることが、そのままただちに美である／となる、と言い換え得る。これをさらに散文的に噛み砕くならば、情が山水を欣賞する状態になければ、それは美ではないが、情が山水を欣賞する状態であれば、それは美になる、ということである。情一般ではなく、情が特定の方向にはたらいている状態、情の、ある特別な状態が美である、ということである。

これは、小稿の第二章の「六」に記し、前稿の結論部分にも提示した、次の解釈とほぼ同意なのではないか。

そうとすれば、謝詩第十九句目「情用賞爲美」は、元来あり得べからざる、しかし修行中の身には依然存在する「情」が、「賞」すなわち山水欣賞によって、「美」すなわち慧遠や宗炳の記す「化」され「潔」らかにされた状態になってゆく、という意味に取り得る。

「情」とは本来存在すべからざるもの、その意味では悪しき

ものである。しかしそのことをいまだ悟り得ぬため輪廻を繰り返す身にとって、「情」は存在する。その者が山水を欣賞する。そのとき、彼の「情」はそのまま「美」となる。もとよりありうべき境地とは、「情」が本来の無となることである。しかしそこまで到り得ぬ者にとって、そのときその場の「情」だけは、より望ましい方向に浄化されるのである。

原詩の「賞」を、李善が「所賞」と言い換えて「賞」する「こと」それ自体と解していると判断される限り、李善の第十九句目への解釈は、おそらく右のようであったと推察される。

しかし第三章に記したように、五臣はそこから、右の如く重大な意味を含んでいたはずの「情」字を、省き去った。加えて、「情」が、ではなく「賞」する対象が「美」となるという傾きの解釈を、示した。五臣以後の解釈はおおむねこれを襲い、「情」字を無視するか閑却する方向で施され続けてきた。

前世紀半ばに葉笑雪氏が「情」を「入神地」とする解釈を示した。しかしそれも多く見逃され、前世紀末に至ってようやく、「情」字に着目した解釈が再提出された。しかしそれらは、葉氏の「入神地」を承けて「情」を「真情」「清志」と置き換え、「情」を「まごころ」とプラス価値にとらえるものであった。こうした解釈はおそらく、近代の人間中心主義的な思考の枠組みから出ていよう。「情」を大事なものとするヒューマニスティックな思考の枠組みから、「情」は本来存在し得ないとする発想は生じがたい。

しかし近代的な思考の枠組みを、五世紀の謝霊運や七世紀の李善に、そのまま当て嵌めることはできない。「情」とはじつは本来存在しない、望ましからざるものとする前提のもとに、その「情」が、山水を欣賞するときに、例外的に浄化されて「美」となる。謝霊運や李善は、おそらくそう言っているのではないか。こうした思考の前提部分を形作るのは、謝霊運や李善の時代の仏教的な思念であろう。しかしそうした思念は、こと謝霊運「斤竹澗」詩第十九句目を解釈する際には、五臣以来ほとんど考慮に入れられてこなかったように見える。

謝霊運「斤竹澗」詩第十九句目に付された李善の十三字は、現代の我々から見れば、きわめて舌足らずでわかりにくい。碩学にして寡黙な李善は決して、誰にでも容易に納得できるように詳説してくれるわけではない。しかし、当時の「情」に対する思念や「所〜」の用法を踏まえるならば、李善の十三字は、原詩の含意にぴたりと即しつつ、それを自らのことばで言い換えた、李善自身にとってはあまりにも自明な一文であったと考えられる。小稿は、その李

善のことばの真意を、今一度蘇らせたいという、ささやかな試みの一つである。

註

（1）「猨鳴誠知曙、谷幽光未顯。巖下雲方合、花上露猶泫。逶迤傍隈隩、苕遞陟陘峴。過澗既厲急、登棧亦陵緬。川渚屢逕復、乘流翫迴轉。蘋薸泛沈深、菰蒲冒清淺。企石挹飛泉、攀林摘葉卷。想見山阿人、薜蘿若在眼。握蘭勤徒結、折麻心莫展。情用賞爲美、事昧竟誰辨。覩此遺物處、一悟得所遣」。尤袤本『文選』（石門圖書有限公司影宋本　一九七六年）による。以下も該本と足利学校藏明州刊本（人民文学出版社　二〇〇八年影宋本）による。

（2）台灣大學・清華大學・中央研究院文哲研究所・台南藝術大學共催「重探自然――人文傳統與文人生活」國際學術研討會、二〇〇八年六月、台南藝術大學にて。会議に提出した論文は、二〇〇九年十二月に『自然詩學重探』と題する論文集に収録され発刊される予定。

（3）矢淵孝良「謝靈運山水詩の背景―始寧時代を中心として」、『東方學報』第五十六冊、一九八四年。その一七六頁注（八九）に「ここは素直に「情は賞するを用て美と爲す（爲る）」と讀み、人の心は自然を賞でることにより高められるという方向で解したい。」とある。

（4）林文月「中國山水詩的特質」一五四頁と一七〇頁、『中外文學』第三巻第八期、一九七五年。

（5）森野繁夫『謝康楽詩集　巻上』（白帝社　一九九三年）三一七頁も張銑注を「忠誠を賞楽するを」と読み下し、「君への忠誠を賞楽す」と解釈している。

（6）劉履『風雅翼』巻六「選詩補注六　宋詩一」参照。王雲五主編『四庫全書珍本』第六集による。

（7）「『事昧』、蓋謂廬陵王為徐羨之等譖癈、尋復見殺、及己亦因此而出也」とある。カギ括弧と読点は引用者付加。

（8）現代文ではなく古文体で書かれている場合はこの限りではない。たとえば岡田正之・佐久節訳註『國譯漢文大成　文學部第三巻　國譯文選中巻』（國民文庫刊行會　一九二二年）は「抑々事は己の心に適するを以て美となす」（一五〇頁）として劉履の解釈をほぼ襲い、独自の見解は付け加えられていない。

（9）葉笑雪『謝靈運詩選』（古典文学出版社　一九五七年）九四頁。本文の引用に続くのは「九歌中所詠的山鬼事情、它本身就是一個誰也無法證實的傳説！」。

（10）余冠英『漢魏六朝詩選』（人民文学出版社　一九五八年）二三八頁。

（11）黄節『謝康樂詩注』（人民文学出版社　一九五八年）七七～七八頁。

（12）小尾郊一『中國文學に現われた自然と自然観』（岩波書店　一九六二年）二九四頁。

（13）同右五四九頁。

（14）一九六八年の小尾氏「謝靈運の山水詩」（『日本中国学会報』第二十集。のち『謝靈運―孤独の山水詩人―』所収。汲

古書院　一九八三年）九十頁にも「つまり山水それ自體には、美の價値判斷をされる要素を持っているわけではなくて、山水を味わう人自身によって、美の價値が決まるというのである。」とある。

(15) 内田泉之助・網祐次『文選（詩篇）上』（明治書院　一九六三年十月）一八〇頁。同書の「例言」に「晉以後の作品は網が釈した。…但し、いずれも作稿後は互いに稿本を交換して刪正を加え、なお不審の点に意見を交換した。」とある。なお、本文所引部分の続きは「その事は味くて結局たれが知り得るであろうか（あるまい）」。

(16) 斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房　一九六三年十二月）三〇〇頁。同書四四一頁に「古詩十九首および楽府古辞のうち飲馬長城窟行は斯波六郎訳、他はすべて花房英樹訳である。」とある。

(17) 顧紹柏『謝靈運集校注』（中州古籍出版社　一九八七年）一二三頁。なお顧著は中国簡体字で表記されているが、便宜上日本漢字の新字体に改めて記す。以下の表記も同様。

(18) 陰法魯審訂『昭明文選訳注』（吉林文史出版社　一九九二年）第三冊二六七頁。以下の引用は二六九頁。

(19) 『訳注』のこの解釈は、じつは前掲の葉笑雪氏が一説として挙げていた次の解釈を襲うものである。「（有人説、這二句寫的是詩人遊覽山水所得的一種體會。説只要你用情欣賞、即閒花小草、亦具眞美、正不必選擇欣賞的對象。…）」。

(20) 王令樾『文選詩部探析』（國立編譯館　一九九六年）一五七頁。

(21) ただし王氏の用いる「所～」が、小稿第七章に記した「～すること」の意であるなら「美」となるのが「心情」である可能性も出てくる。しかし「心情」は「清志」ともされ、すでに「美」であるようなので、「美」となるのは欣賞する対象だと判断した。

(22) 森野氏前掲書三一四頁、三一七頁。

(23) 「儵」字は尤本には「儵」に作るが、九条本、足利本、および胡克家の校異に従った。

(24) 『漢語大詞典』第七巻（漢語大詞典出版社　一九九一年）三五〇頁。本文に挙げた同書の挙例は、馬其昶校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』（上海古籍出版社　一九八六年）、『水滸伝　上』（人民文学出版社、一九七五年）で確認した。

(25) 『荘子』斉物論篇の「類與不類、相與爲類、則與彼無以異矣」に対する郭象注「欲謂之類、則我以無爲是、而彼以無爲非、斯不類矣。然此雖是非不同、亦固未免於有是非也、則與彼類矣。故曰『類與不類、又相與爲類、則與彼無以異也』。然則將大不類、莫若無心」である。

小稿は、平成十九～二十年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「魏晋六朝文学における美と聖性」による研究成果の一部である。